

ツェルビネッタの涙 —— ケースメソッド報告 ——

長谷川 淳 基*

I

ツェルビネッタが泣いた。

「王様が泣いた」、宮廷のいたるところこの話でもちきりになる歌劇は『ドン・カルロ』。暴君フェリペ2世の目から流れる涙は、老いてなおひとりの女性をいとおしく思う男が流す涙。少年トニオ・クレーガーは14歳。彼はこのフェリペ2世の哀れさを想い胸のうちに泣く。老人の涙、少年の涙。

II

コメディア・デラルテに登場するお決まりの蓮っ葉コロンビーナは、オペラ『ナクソス島のアリアドネ』では、旅芸人一座の花形女優ツェルビネッタとなって登場する。

英雄テーセウスに捨てられ悲しみにやつれ、死を望むばかりの王女アリアドネに、「王女様、あなたはおばかさんよ」と声をかけ、慰め元気付けようとする陽気なツェルビネッタ。

男友達との付き合いは、途絶えたことがないのはもちろん、同時に二人の男と付きあったことも再々、これが人生よ、と陽気なツェルビネッタ。

この蓮っ葉ツェルビネッタが泣いた。

一人の男だけを思い続ける王女アリアドネの涙は気高く、美しくそして悲しい。

でも、ツェルビネッタが流した涙はずっと悲しい。陽気なツェルビネッタはもちろんオペラのシーンでは泣かない。舞台裏の涙。

III

エレクトラは弟オレストと再会したときに泣く。凍りついていた魂が緩み、流れる涙。そして今、復讐を果たしたエレクトラは息絶える。その目には恨みを晴らした歓喜の涙が滲んでいる。崇高な涙。

IV

ウィーンのオペラは『ばらの騎士』。美貌はヴェルデンベルク公爵夫人マリー・テレーズ。彼女は鏡につぶやく「時がさらさらと流れている、鏡の中に、鏡に映る顔の中にも」。夫の陸軍元帥ヴェルデンベルク公爵とは父娘ほどに年が離れていた。そのために多くの恋人たち。し

*人間関係学科 教授

かし彼女をさらって行く男は現れなかった。運命を変えてくれる男は現れなかった。美貌のマリー・テレーズは去り行く人生のはかなさを想い、そっと涙をぬぐう。諦めの涙。

V

ドイツの悲劇作家はヘッベル。そのヘッベルが楽しいメルヘンを書いている。しかしメルヘン『ルビー』は他の作家でも書ける。悲劇『ユーディット』はヘッベルにしか書けない。敵の將軍ホロフェルネスを殺し、町を救ったユーディット。彼女はつぶやく「神のため、町を救うためにホロフェルネスを殺したのだろうか。そうではない。私を穢し、私を辱め、そして、私が知らない私がいることを、この男は私に分からせたから。この世に二度と現れない男、この世に二度と生まれない男を、私は殺してしまった」。「何なりと褒美をとらせよう。願いを言うがよい」と言う長老に、ユーディットは答える「私を殺してください。唯一の願いにございます」。目は涙できらめいている。女の涙。

VI

誰の涙も悲しい。悲しみの涙に序列があるわけがない。でもツェルビネッタの涙は一番悲しい。陽気な蓮っ葉の涙は、目からほとばしった。顔を覆う両手の指を伝う涙。絶望の涙、空涙。

VII

ケースメソッド「演劇・オペラの人間関係」、「メルヘンの人間関係」において、ほんの僅かではあるが、こういうことを好んで考える学生たちがいる。